

法学部教育における模擬裁判の実践例

鈴 木 博 康

- I はじめに（あるいは、とくに「模擬裁判」なる語の非共通言語性）
- II 本学における法廷教室の運営と模擬裁判の位置づけ
- III 模擬裁判の実践例
- IV むすびに代えて

I はじめに（あるいは、とくに「模擬裁判」なる語の非共通言語性）

当職が、本学法学部の現行カリキュラムにおける3年次配当の専門演習A（通年4単位）の担当者として模擬裁判を実施するようになって、3ヵ年度が終わろうとしている。若干自負するところも無いではないが、本学での模擬裁判の実施は、過去多年にわたって、高校生に向けたオープンキャンパスでの定例企画になっているという位置づけに典型のように、見学に訪れた高校生に対する大学・学部紹介企画としてはもちろん、そしてまた、（現在では）正規の授業として実践する中でも、学部教育としても相応の効果・影響を有しているものと考えている。

本学では長らく、夏季のオープンキャンパスにおいて、高校生に向けた法学部の紹介として、その施設やカリキュラム、奨学金制度および教育内容等について各種企画が行なわれてきたが、模擬裁判の実施⁽¹⁾も、こうした法学部紹介

(1) なお、高校生にとっては、いわば模擬裁判「劇」の観劇としての側面もあるので、観客、その他方で、模擬とはいえ裁判であるので、高校生は傍聴席にいる傍聴人でもある。以下、観客、傍聴人、といった表現を用いさせていただく。

の一環をなすもので、例年のアンケート結果にもみられる如く、評判の良い企画となっている。

反面、本学で脈々と受け継がれ、築き上げられて来た模擬裁判の取り組みについては、もちろんこれまでの代々担当先任教員の功大とするものであるし、各担当教員ごとの創意工夫によってなされてきたものだったとはいえ、その教育手法のいわば組織的継受・検証⁽²⁾は、必ずしも十分になされていたとはいえないように思われる。一般に、現員教員に対して、退職者や他の大学・研究機関等への異動者（この際、新規採用者との人的入れ替わりが生じる）の割合が相対的に高ければ、なおさら、である。組織内における生き字引的存在、「昔のことを知っている教職員」が少なくなるのは、教育に限らず、学内行政の各種場面においても多々見られるところである。

さらに、一口に、大学法学部における模擬裁判、といっても、その実施は、実施形態（授業として正規なものとして位置づけられているかどうか。）に始まり、実施主体（学生だけか、教員が入るか。あるいは大学生ではなく、小⁽³⁾・中学生⁽⁴⁾か、一般市民が入るか/中心になるか。）、方法・内容はもちろん、模

(2) たとえば、ロースクールの民事事件の模擬裁判ではあるが、吉野夏己「民事模擬裁判の教材作成の方法と問題点について」『岡山大学臨床法務研究』8巻（2010年）1頁では、一の教材開発のためには1年以上の期間と多くのスタッフが必要であり、同じものを毎年使うことについても受講者のモチベーションの観点からも問題であるとして、教材の共同利用の可能性について述べる。

(3) 國見真理子「ミニたまゆり「こども模擬裁判」を通じて学んだこと」『田園調布大学紀要』10号（2015）69頁は、大学の地域貢献活動、地域交流イベントの一つとして、小学生を主体に、裁判員の職業体験をしてもらうという狙いから行われているものである。ここでの裁判は、こどもたちには、裁判官、検察官、弁護士という役割ではなく、裁判員として参加してもらうところに特徴がある。

(4) 司法の役割、裁判員裁判の意義を中学校公民の教科中、司法の単元において理解させるために模擬裁判を活用したものと、田村徳至「中学校における法的思考力・判断力の育成に関する実証的研究—模擬裁判を取り入れた授業を通して—」『教職研究』7号（2014年）33頁がある。模擬裁判による学習の振り返りのために検察庁の職員からの講話を取り入れたほか、論者は、裁判傍聴も含めて年間指導計画を計画的に設定し、また、教材開発について、生徒の学習意欲喚起のためには、学校内での傘の盗難、のように生徒にとって身近な事例でシナリオ化することが求められると述べる（43頁）。

同様に、中学校公民での取り組みとして、大友秀明・二瓶剛「シティズンシップ教育としての法教育の実践と課題—模擬裁判の授業—」『埼玉大学教育学部附属教育実践総合センター紀要』13号（2014年）1頁は、生徒の評議の段階で検察官、弁護士を招いて「思考力・

擬裁判で扱うテーマやそのねらい⁽⁵⁾（法学部の学部生向けの教育の一環として、あるいは、主体によっては模擬裁判を通じた理論的思考の涵養、表現力の向上など。）など、様々であり、実施者ごとに「模擬裁判」の語から想定、イメージするものも大きく異なるように思われる（大学に限っただけでも、全国では相当に様相を異にしているであろう⁽⁶⁾）。のみならず、近年は、「法教育」「シチズンシップ」として、高等学校までの初・中等教育機関においても、模擬裁判を授業で展開する取り組みも行われていたり、裁判員制度との関係でも、模擬裁判を用いて市民に対しても語られることがしばしばある⁽⁷⁾。

こうした、いわば「模擬裁判」なる語の非共通言語性については、少々長くなるうえ、大学法学部における授業での運営に限定してという趣旨からは外れるが、当職自身が実際に携わったり、見聞した経験からも様々なものがありうるということのみを示して、さしあたりはこれに代えておく。

自身の学部時代の経験を示すのであれば、授業ではなく、また、その際、実施時期・行事についても、（とくに高校生の夏休みの時期になされる）オーブ

判断力・表現力」育成の授業をしている。

また、中平一義「模擬裁判を活用した法教育実践研究—シナリオに基づいた模擬裁判と司法の原則の認識について—」『兵庫教育大学教育実践学論集』18号（2017年）117頁では、中学3年生の公民科で実施する模擬裁判について、シナリオを実際の裁判手続き同様、忠実に創作して実施している（資料126頁以下）。

さらに、高校の国語の教材として模擬裁判を実施しているものとして、札埜和男「裁判員裁判の判決文を教材とした国語科における教育法」『京都教育大学紀要』122号（2013年）111頁がある。専門家ではない一般市民が加わる裁判員裁判が行われている現行司法制度下において、専門家と一般市民の用語の差異に着目し、適切に表現することをテーマに授業がなされたものである。法曹3者を招いての生徒とのやり取りにより意識された「溝」の存在は、法学部教員においても示唆に富む。

- (5) 前掲・吉野夏己では、民事裁判でも、教育目的によっては全体ではなく、特定の部分、たとえば交互尋問だけを集中的に行うような教材も考えられるとする（5頁）。
- (6) 杉山和之「模擬裁判の法教育効果について」『九州法学会会報』（2015年）9頁では、2大学合同による模擬裁判や、精神科医との模擬裁判を紹介している。また、法学部ではない、メディア社会学科、看護学科、理学療法学科、保健栄養学科における初年次教育における取り組みとして、石垣明子「模擬裁判によるコミュニケーション能力向上の検証—4学科共通「コミュニケーション論」を対象として—」『つくば国際大学研究紀要』19号（2013年）21頁。
- (7) たとえば、種村文孝「市民の法教育における模擬裁判の位置づけと意義」『京都在校大学生涯教育フィールド研究』16号（2017年）51頁。

ンキャンパスなどではなく、秋の大学祭の中の企画の1つであり、教員の手の介さない、学生自身による催しであった。むしろ法学系のサークル活動の延長のような取組であったととらえる方が実態に近いであろう。そのころは今日のように、オープンキャンパス自体がまだ一般的には存在しなかった時代である。今日でこそ、オープンキャンパスの大学・学部を紹介企画としての模擬裁判実施を、多くの大学や学部自体が、あるいは入試、広報の部門自体が、「組織」として、実施を期待している取り組みの1つとなりうるものである。しかし、自身の時代には、ゼミを始めとした授業ではないのはもちろん、オープンキャンパスのようなある種必要に迫られての企画でもないものとするれば、学生にとっての関わり方は、任意の、いわばボランティア（あるいは、学生自身のお祭り騒ぎの企画？）としての参加・運営に過ぎなかった。

毎年時期が近づくと半ば自生的に集まり、ちょうど（すでに当時はほとんど機能していない、ないしは存在しなくなっていた）ゼミ連なるものの後継ないしは代替として、動き出すものであるが、学年を問わず法学科内で横断的に集まった学生が「模擬裁判実行委員会」なるものを組織する。歴代の実行委員会のメンバーは毎年のようにパンフレット作成他の費用確保のために、本学における大学祭のパンフレット作成と同様、近隣の企業・商店を回り、広告や寄付金を募っていた。

模擬裁判で扱うテーマは、社会的耳目を浴びた実際の事件・事案⁽⁸⁾であって、これらの判決文、場合によっては可能な限り、一連の裁判記録にも当たりながら、自分たち自身で模擬裁判としての判決文を作り上げていくというもので

(8) 実際の刑事事件を扱い、その検証を試みた取り組みについては、たとえば、ハンセン病隔離政策の中で特別法廷の設置により行われた刑事裁判の再審の可能性について展開したものとして、岡田行雄「菊池事件模擬裁判とその意義—模擬裁判を通じた有罪判決検証の可能性」36頁、所収「(特別企画) 法学部生による菊池事件模擬裁判」「法学セミナー」2015年2月721号31頁以下がある。なお、同企画の、岩下芳乃「菊池事件について」31頁、および古賀さおり・澤水賢太・立川綾乃・中村麻衣・長濱真衣子・渡邊泰士「菊池事件模擬裁判に参加して」も参照。とくに「菊池事件模擬裁判に参加して」は、模擬裁判にかかわった学部生の感想が寄せられており、興味深い。

あった。大学祭での企画の1つであるので、学内関係者はもとより一般客の来場を予定するほか、学内にはそれに向けた施設がなかったことから、市民ホールを借りきっての上演であった。自身の関わったものとしては、学校教育における体罰やいじめ問題、過労死労災、などであったが（刑事よりもむしろ民事事件が多かったように思う）、古くは家永教科書裁判なども取り上げられたようである。

また形式としても、法廷の場面のみならず、前半部には事件そのものを演じる場面（いわゆる事実シーン）をも創作し、それを受けて後半部には、舞台を法廷に見立てて訴訟関係者が法廷でのやり取りを演じるという（いわゆる法廷シーン）の2つからなる構成であった。準備においても、事実シーンにおける台本作成はもとより、舞台上での演技・振り付けはもちろん、セリフあわせの練習を始めとした取り組みがなされるような模擬裁判なので、もちろん判決文は学生自身の手で起案し資料として観客に配布するなど、法学部生らしい営みはもちろんあるが、演劇部サークルの興行のような面も見られた。

当職が学部学生時代に経験した模擬裁判は、いわば見世物、ショーとしての演劇としての要素も大きく、当日の配役こそ法曹3者などに分かれはするものの、舞台としての脚本、台本は全体で話し合いながら、裁判の内容を関係者全員が共有し、意見を出し合いながら進めていくというものであった。

このような演劇的な模擬裁判もあれば、現実の裁判さながら、たとえばゼミなどの正課の授業において、学生を裁判官、検察官、弁護人（被告人）の各班に分けたのちは、互いに手の内を明かさずに、各班ごとに訴訟準備を行うなど、忠実に実際の法廷でのやり取りをまねて行う形のものも考えられる。この場合には、模擬裁判の期日も長期にわたり、ゼミの開講期間、丸1年間かけて展開するということもあり得るだろう。授業そのものであれば、そもそも、傍聴人、観客が不在でも成り立ちえ、誰かに見せるという目的がないでも成り立つ。この場合は、非公開の授業そのもの（学生と教員の授業当事者のみで完結する）となろう。

担当する授業において協働を意識して進めてきた当職が本学で実施している模擬裁判は、どちらかというと前者に近い。全員が検察官になったつもりで起訴状を起案し、のちには立場を変えて今度は全員が弁護人・被告人になったつもりで弁論構成を考える、というように進行するからである。

本稿は、本学における模擬裁判の過去の担当者の実践例も合わせて示しながら、当職の実施してきたこれまでの模擬裁判を紹介することで、論者によってイメージするものが異なりうる「模擬裁判」なるものの多義性に対して、実際の取り組みとしての一例を示し、その実施手法を共有・情報提供するための一助とするものである。

Ⅱ 本学における法廷教室の運営と模擬裁判の位置づけ

1. 正課およびオープンキャンパス企画としての模擬裁判

現在3号館に所在する法廷教室は、本学が枝光キャンパスから現在の平野キャンパスに移転してきた当初から設置されたものであり、高校生向けの大学案内を始めとするパンフレット等でも大きく紹介されている。法学部はもちろん、大学としても自慢としている施設の一つである。今日でこそ各地にロースクールが設置されたこともあり、本学のような法廷教室と同様の趣旨、施設を持った大学は全国には少なくないが、学部専用での、それも90年代初頭からこのような施設を有していた大学は珍しいのではないと思われる（各写真参照）。

現在の模擬裁判は、専門演習という正課の授業としてなされ、実体法や手続法などの法解釈や裁判手続などを学びながら展開し、また、それらの知見をもとに学生は裁判の形で表現してみるという取り組みである。従って、オープンキャンパスはそうした授業の成果のごく一部分を外部に示すものに過ぎない。

他方、本学においては、オープンキャンパスの「主力企画」としての位置づけもあることから、来場者に向けた紹介企画としての催事、いわばショーとし

での意味合いがある。模擬裁判の内容につき、学問、教育という観点からは、刑事法学的な意義・必要性、面白さといった視点からの争点の設定ももちろんありうる（ゆえに授業として1年にわたって模擬裁判を実施することも方法的にはありうるわけであるが。）が、ショーとしての側面からは、時間内に模擬裁判を演じる（当日は模擬裁判以外にも大学学部等の紹介企画があるので、高校生たちが法廷教室に入って模擬裁判を観劇・傍聴し、学部アンケート記入の上、退室するまでせいぜい40分程度が確保できればいいところである。）、仕上げる、という制約を受ける。そうであれば、担当教員としては、授業内での展開の中から、ショーとしてのいわば見せ場を中心に構成することが必要となり、とくに観客・傍聴人は高校生が主であるという属性にかんがみ、比較的理理解しやすいであろうテーマ設定はもとより、争点を組むのにも当たり、内容的に一定の取捨選択を余儀なくされる。

これに関連して、以前、学部の入試・広報委員から、法学部の中のなかんずく、模擬裁判を行う、高校生に見せたい、ある特徴的なゼミ、の発表の場というに限らず、オープンキャンパスを学部、ひいては大学の紹介の場としてとらえた時に、全学的な企画の1つとして位置付けること、すなわちゼミの学生だけでなく、演劇部サークルの学生とともに実施してはどうか、という趣旨の提案を受けたことがある。具体的には、模擬裁判の、実際の裁判手続にのっとった、法廷内でのやり取り、すなわち台本シナリオの作成の部分は法学部のゼミ生が担当し、当日法廷教室では、演技についてそれなりのトレーニングを積んできている学内演劇部員（当然に法学部生ではない他学部の学生も入りうる）に演じてもらうのはどうか、というものである。担当者としては、本学全学での企画の一つとしての、そして法学部ゼミ生と演劇部のコラボ企画としての催しであれば、（両者のすり合せなどの準備はともかく）演技の上手な学生に行なってもらったほうが、ショーとしては望ましいのは言うまでもない。しかし、模擬裁判の実施は、教育でもあるという側面からは、正課のゼミとして、ゼミ生自身によって学んできたものを裁判に反映させ、ゼミ生によって完結した取

り組みであることが求められる。ショーをするためだけに模擬裁判をしているわけではないからである。

現在でも、ゼミ生たちは自分たちなりに考えた演技・演出を行ったうえで展開はしているものの、実際の当日の模擬裁判は、セリフそのものを暗記しているわけでもなく、台本を見ながらそれをしゃべる（それも練習不足か緊張か往々にして棒読み）、というやり方になっており、もしこれを「演劇」であるとするれば、大変にお粗末なものである。しかし、授業としては、演劇性の完成度を追求するよりも、刑事法の知識を身につけ、それをもとに模擬裁判に取り組むのを主眼とせざるを得ない。

当職が模擬裁判を担当するようになったのは2年前の2015年度からであるが、模擬裁判を通じた授業は、現行カリキュラムにおいては、3年次配当の専門演習A（通年4単位）の中で実施されている。また本年度2017年度からは、専門演習Aだけではなく、4年次配当の専門演習B（通年4単位）も担当することとなったこともあって、これを機に専門演習Bとしても開講・実施することとして、模擬裁判を運営することとなった。これは、おそらく本学法学部では過去例が無かったであろう、複数年次生合同での演習授業の形で行われることにもなった。

3、4年生が合同して一の模擬裁判に取り組みたいとすることから複数年次生合同での演習授業を意図しつつも、当初はそもそも専門演習Bを担当していなかったという点から実現できなかったのは当然としても、担当教員の目論見としては、とくに前年の経験者たる上級生が下級生を指導するいわばピアサポート的な側面を期待してのことでもある。その教育的意義については、学生間における模擬裁判運営の継承ということのみならず、特に就職活動などにおいては、先輩の活動を後輩たちが間近に見聞するということにもなり、同一学年のみで行われる演習に比べ、学生間においては一定の刺激となっているものと考えられるが、具体的なそれら教育的効果・成果については本稿の趣旨から外れるので、指摘だけにとどめる。

本学における模擬裁判は、オープンキャンパスの企画ということは古くからあったにせよ、授業の一環として行う、という点では、以前から現在のような形態でなされていたというわけではない。当職自身が法学部同僚教員の一人として見聞きしてきた経験としても、前任者、さらには前前任者が担当していたものも、現在とは異なる科目として開講されるなどの時期もあった（それ以前には正課ではなかった時期もある。）。

当時の様子を確認するには資料が限られているが、法廷教室に残存するパンフレットや書面などによれば、本学において過去行われた模擬裁判としては、以下のようなものがある。

たとえば2002年（平成14年）では、民事訴訟法の教員が担当者であったことから、交通事故の被害者が加害者の運転により高度の障害を負ったものとして、運転者とその使用者である会社に対して損害賠償を求めた事案で、不法行為責任、使用者責任を検討している。さらに、自動車損害賠償法施行令別表の後遺障害等級表、運動能力喪失率などを用いながら、損害の認定などもしていたようである。また、書面関係についても、訴状、答弁書を作成し、裁判を展開していた様子がうかがわれる。

資料が限られるので間隔があくが、2004年（平成16年）には、この間に担当者の交代もあったために刑事裁判が行われるようになった。交通事故による死亡事故を取り上げ、目撃証言があるものの、次第に被告人の顔、車両ナンバーは見えていないということや、被疑者・被告人は自白を強要されたということが公判の中で次第に明らかになっていく、という展開である。

また、その後さらに担当者が交代してのちの、2010年（平成22年）には、妻の介護殺人未遂事件を取り上げており、夫婦で心中を図ったがともに生存しているという設定で展開する。この年の模擬裁判の特色としては、学生がゼミの時間に起訴された旨の電話を受けたなどというシナリオに始まり、模擬裁判のドラマをメイキング風に仕上げるという点で、観客の高校生を意識してか、演出面でかなり凝ったものになったようである。さらには、量刑に関して、被害

者が処罰を望んでいない事案であることから、傍聴人たる高校生に、刑事手続のそれぞれの場面を解説するにとどまらず、刑罰の目的・意義といったことにも思いを巡らせる工夫が仕掛けられていたようである。

このように、近年（とはいっても管見の限りここ10数年程度の知見であるが）当職を含め、当職の前任者および前前任者が、いずれも刑事法専攻教員であったこともあり、ここしばらくの間は模擬裁判としては刑事事件が定番であるが古くは、民事事件も行なっていた。また、当該教員の異動・退職に伴い実現こそしなかったが、憲法・行政法の担当者からは、刑事・民事事件に限らず、産廃などの環境問題を取り上げることができるのではないかという提案もあった。

2. 本学カリキュラムにおける模擬裁判の位置づけ

カリキュラムでの位置づけ、すなわち授業との関係でいえば、古くは（当職の本学への着任は2005年度であるが、それ以前には）正課外の活動として行われていたようである。今日でこそ、オープンキャンパスの学生スタッフのように、正課外での活動をしている例もあるが、以前は、刑事訴訟法Ⅰ・Ⅱの担当者（刑事政策Ⅰ・Ⅱの担当者でもある）がその受講生の中から希望者を募る（あるいはスカウト）などをして、その指導者の下で、ボランティア学生、有志学生によって運営されていたようである。これが正課としての取り組みに代わっていくのは、学生（単位になるのであれば学生のモチベーション向上になるのではないか、というのは、エクステンションセンターの講座履修についても一定の条件のもとで、単位読み替えの扱いをするのと同様の考え方であろう。）にとっても、また、教員にとっても相当負担であることから正課としての科目の一つに位置付けるようになったからである旨、当職が当時の担当者からヒアリングしたことである。

本学の過年度のシラバスによれば、2006年度（平成18年度）、2007年度（平成19年度）では、入門演習1年次配当、基礎演習2年次配当、発展演習3年次

配当、応用演習 4 年次配当、実践演習 3 年次配当がいずれも通年 4 単位として開講される中、応用演習が 3 人の教員により 3 クラス開講されている。その内訳は、模擬裁判のほか、法科大学院受験対策の演習、そして 3 番目に、エクセルの利用等を通じて、法律、政治、行政に関係するデータ解析を行う演習の 3 つである。また、実践演習は 1 クラス開講され、実務家教員による指導の下、ここではマンション法を中心に、宅建などの受験対策をしている⁽⁹⁾。

当時は、これらの演習科目の中で、模擬裁判は応用演習として行われたが、この時点では模擬裁判の実施を一連の法律学特殊講義 I ～の科目として開講することはなされていない。なお、2007 年度に入学したいわゆる 07 生の世代では、現在とは異なり、法律学科のほかに総合実践法学科が存在したほか、昼間主コース、夜間主コースも存在したことから、演習の開講クラス数・時間割の設定も多様であった。

2008 年度（平成 20 年度）は、前前任者の退職に伴い、前前任者から前任者へと模擬裁判の担当者の移行時期にあたっている。前前任者から前任者へ模擬裁判の担当が移る関係で、この年から応用演習を前任者が担当することとなった。ちなみにこの年は、応用演習には模擬裁判のほか、前年からは担当者が変わるものの、演習のクラスには同様にロースクールを目指す者を主眼にしたクラスが開講されるほか、実践演習には、これまでと同様に宅建受験の指導が中心になるクラスと、大学近隣の商店街において活動を行うクラスの 2 つが開講されている。

2008 年度の「模擬裁判ゼミ」は、前任者の担当する応用演習であるが、この年はこの担当者が本学着任初年度であることもあり、模擬裁判の授業の連携が

(9) 2017 年度では、専門演習 B の開講は、模擬裁判のほか、リスク、地方自治、知的財産の 4 クラスである。

今日では、4 年次配当の専門演習 B の履修は、3 年次に専門演習 A を履修登録する際に、学生において再来年の履修も考慮・検討の上エントリーシートを提出する実態になっている。結果として、3 年次からの持ち上がりがあるのは、原則として、専門演習 B を開講している教員のみになっている。

試みられた。すなわち前前任者を「法律学特殊講義Ⅲ（模擬裁判）」の非常勤講師として採用することで、学生の指導とともに、教員間の模擬裁判指導のノウハウの教授もなされた。具体的には、応用演習は火曜日の5限に法廷教室において開講されたが、それとともに同一時間帯に、前前任者により法律学特殊講義Ⅲの科目も開講し、教室には、応用演習の履修学生と、法律学特殊講義Ⅲの履修学生とが存在し、それぞれのクラスの学生が共同して模擬裁判を実施する形での運営となったものである。

翌年の2009年度（平成21年度）では、着任2年目となった前任者が1人で応用演習の中で模擬裁判を実施する形となった。前年の法律学特殊講義Ⅲもこの前任者が担当することとなったが、法律学特殊講義Ⅲの授業自体は、シラバスによれば、刑事手続（とくに公判前整理手続。立法動向との関係で関心が大きかったものと思われる。）を学ぶものではあるものの、模擬裁判を実施することを主眼とした授業ではない。なお、この年の応用演習は2つ開講されており、模擬裁判のほかもう1つは前年度同様の担当者による法科大学院対策であり、実践演習も2つが開講され、宅建指導と、商店街の活動であるのも変わりはない。

このように、本学における模擬裁判は、古くは正課外のものとして行われてきたが、次第に授業として行われるものへと変遷していった。また、その際、担当者交代の際の一時期の例外はあるものの、ゼミの中で行われるものを基本とする。もっとも、現行のカリキュラムとは異なり、3年生というよりは4年生を中心に行われ、すなわち、当時の応用演習において行われていたことは現状とは大きく異なり注意がいる⁽¹⁰⁾。

(10) 以前は現在の、刑法総論（2年次配当、2単位完結）、刑法各論（3年次配当、2単位完結）とは異なり、刑法総論Ⅰ・Ⅱ（いずれも2年次配当、各2単位）、刑法各論（いずれも2年次配当、各2単位）であり、模擬裁判には、学年的にも、分量的にも一定程度の刑事法科目の履修を経てきて参加していた。本学には古くはほかにも、経済刑法、刑事政策、少年法などの科目もあった。なお、刑事訴訟法の配当等については以前から変更がない。

Ⅲ 模擬裁判の実践例

1. 専門演習A・Bとしての運営

本学のオープンキャンパスは、例年、春学期の定期試験の終了する週末土曜日を基本として行われている。高校生にとっては夏休みに入って間もなくの、各大学のオープンキャンパス詣での時期にあたる。ゼミ生、学生側にとっては、日程によっては定期試験などのいわば悪条件も重なることもあるが、この時期までに模擬裁判を仕上げるのを至上命題とされる。

2015年の担当初年度は、3年次配当の専門演習A（通年4単位）の科目だけでの実施であったために、関わる学生は3年生だけであった。本学部では、ゼミの募集手続の際にエントリーシートの記入・提出が必要であるが、あいにくそのエントリーシートによれば、第一希望で当ゼミを希望していた者ばかりとは限らなかった。

もっとも結果としては、上でも触れたとおり、学生の取り組みも前向きで、オープンキャンパスの来場者から好評を得たので、次年度以降も当職が担当することになったほか、やがては4年次配当の専門演習Bと合同して行なうことにもなった⁽¹¹⁾。

オープンキャンパスで模擬裁判を行うことが到達目標の一つであることから、春学期15回の授業回数が限られた中でいかに計画的に授業を進めるかのスケジュール管理が、専門演習Aを担当する者にとっても課題となる。

(11) 本学においては、演習の単位については12単位を要卒単位としていてところ、1年次の入門演習Ⅰ・Ⅱ（各半期2単位、計通年4単位）、2年次の法律学基礎セミナー（通年4単位）が必修科目であり、選択必修科目として3年次配当の専門演習Aの通年4単位と、4年次配当の専門演習Bの通年4単位が開講されている。学生からすると、早くに要卒単位の取得を済ませてしまいたいという意識から、3年次に専門演習Aを履修する学生がほぼ全員で、4年生になって演習を履修する者は限られた希望者だけであり（開講ゼミ数もきわめて限定的である。）、カリキュラムの改変は過去幾度となく行なわれてきてはいるが、3年次までにゼミの単位を修得して、4年次になると学生は持ち上がりでなければほとんど履修する者がいない状態である。学生としては4年次のゼミを経験することなく法学部を卒業していくというスタイルはその可否は別論として、古くからの本学の特徴である。結果、4年次にはゼミは限られた希望者だけが履修する形となっている。

例年、専門演習A（キャリアチュートリアルⅢ（通年2単位。隔週開講として実施する教員もいるが、当職においてはキャリアチュートリアルⅣとともに、半分の時間で毎週開講で行うこととしている。）の時間も含め）の時間内で、プログテストの実施や就活出前講座が予定されたりする関係から、全回を模擬裁判のための授業にあてることはできない。年度によって多少の相違はあるものの、おおむね以下のような進行である。

すでに前年のゼミのエントリーシートの記載時の参考資料として、当方のゼミにおいてはオープンキャンパスに向けた模擬裁判を行うことを明示してあるので、ゼミ生において春学期の内容について「模擬裁判」であることにつき認識できていない者は、ゼミの希望順位の上位・下位にかかわらず、とりあえずいないものと理解している。新年度初回は、ゼミ生相互の顔合わせを基本とするほか、目標地点の模擬裁判を認識してもらうべく、前年の模擬裁判の資料配布および撮影動画の上映を行う（但し、担当初年度は当然ながらこれがない。）。もっとも専門演習Bとともに展開するようになってからは、前年のゼミ生にあっては重複の問題もあるので、キャリアチュートリアルⅢの時間をメインに展開することとなる。反面、今後一緒に模擬裁判を実施していく上級生・下級生間の顔合わせでもあることから、アイスブレイクのためのアクティビティは重要である。翌週以降は、前週からのアクティビティの延長の意味も込め、図書館での文献調査を3、4年生ペアで実習として行う。主に判例集にあたり、指定のものを見つけ出すという作業を中心としているが、これには判決文を実際に（とくに紙媒体で）確認してもらうところに意義がある。往々にして、一般に講義の中で使われる教科書等に引用されている判例に実際にあたっている学生は、思いのほか少ないものである。

演習の展開としては、この間に、上述就活関連行事も入りうるが、次第に模擬裁判の取り組みが始まるところ、春学期の比較的早期の段階で模擬裁判のために、実際の法廷を見学することをフィールドワークとして用いることとしている。これから自分たちが作り上げていく模擬裁判を前に、本物の裁判を経験

してもらうのが狙いである。これは一例ではあるが、のちに刑務官役となった学生は、本物の刑務官が被告人質問などの際には座席の位置を変えていることを観察しており、模擬裁判当日には学生自身によってそうした演出を組み込んだ演技がなされていた。(当職は模擬裁判を担当する以前から、年次を問わずこうした演習科目の中では極力裁判傍聴に引率するように努めてきたので、フィールドワークは今に始まったことではない。傍聴先はおもに大学最寄りの福岡地裁小倉支部である。))。

その際、事前に裁判所との打ち合わせにより、日時のみならず、なるべく1回で結審しそうな事件をリクエストしている。学生にとっては、証拠調べの途中を傍聴するよりも、冒頭手続きから確認していくほうが、「裁判らしい」場面を経験できるからである。はたして、当日に結審し、次回が判決公判となったような場合に、学生の中からは次回も傍聴したい旨の希望が寄せられたりもするが、授業時間数がタイトでもあるので、ゼミとしてはそこまでは実施していない。もっとも、当職の経験の中では、こうした裁判所見学を機にその後も自発的に自分で出かける例も数は少ないものの散見される。

現在の入門セミナーⅠ・Ⅱ(半期各2単位)、以前であれば入門演習(通年4単位)、いずれも1年次配当科目において、(担当年度の際には当職も実施したように)担当教員によっては、裁判所見学も取り入れているゼミもあるようであるが、必ずしも、法学部生だからと言って3年次に至るまでの間に、法廷傍聴の機会はずしも多いわけではないようであり、本物の法廷を見たことがないという学生は相当数いる。ゼミや講義等の授業でもない限り、実際に、学生自身がすでに裁判所の見学の機会を経ているというのはそう多いことでもない。ちなみに、当職のゼミでは秋学期には、刑事施設の見学を毎年の恒例としている。

授業では次第にテーマ設定の問題に移っていくが、初年度の本能寺の変以降、その方法を踏襲して、既存の事件・物語をもとに、学生が独自に脚色、展開していくことによって作られていく。もちろん、おとぎ話、昔話であれば、

どんなものであっても刑事事件、模擬裁判として展開しやすいということにはならないが、ゼミ生間で意見を出し合ううちに、被告人の設定や事件、争点などについておおよその「あたりをつけた」物語のいくつかのうち、候補が絞られてくる。この辺りまでで15回の授業回数のうち半分弱を費やすこととなる。

運営によっては、検察官グループ、被告人・弁護人グループなど早い段階から班分けして、それぞれに訴訟活動に向けた作戦を立てる、という方法もあり得ようが、当職のゼミではそのような分け方、進行の方法はとっていない。今年度3年目に実施した浦島太郎であれば、被告人を乙姫としたところまでを全員が共有したところで、次回演習までの宿題として、各自が「起訴状」を起案してくることを行わせる。もちろん、起訴状、なる言葉は知っていても、実際には何を記載しなければならないのか、そうした訴訟法上の規定に関する知識も身につけていなければ起案することはできない。すでに訴訟法の講義等で知っていればさほど障害はないであろうが（そうした場合は復習の意図も含めて）、担当者において一定程度レクチャーをする必要はある。もちろん学部生のそれとは大きく異なるだろうが、知識に基づいて書面を起案するという作業は、ロースクールで現に行われている手順と変わるところのない、基本的な手筋と理解してよいであろう⁽¹²⁾。

以前、意欲的な学生が、起訴状のみならずその後の展開も意図して、冒頭陳述、さらには弁論要旨など裁判全体の骨子を一人で一通り検討してくると意気込んで取り掛かろうとした例がある。しかし、限られた時間内では、検察官と弁護人のそれぞれの主張、両者の対立について、双方から事案を設定していく営みがいかに困難であったか、思考が混乱してきたために途中でとん挫した。つまり、一方の立場になりきって物語を作るものの、争点のためには、今度は逆の立場に立って（しばしばそれを否定する形で）物語の展開をしていくこと

(12) 法科大学院についての書面作成の進行例としては、遠山信一郎「民事模擬裁判—五感をフルに活用する能力開発型授業—」『中央ロー・ジャーナル』13巻2号（2016年）173頁、とくに177頁の工程表参照。

について、双方の立場の意識を変えるのに相当苦勞したということである。

実際に模擬裁判の配役について早期から決めておくことは、その立場になりきった準備、訴訟活動をする上で割り切れるということもあるが、学生においては一当事者にのみ関与するのではなく、両当事者、あるいは証人についてもシナリオを共に考えていくことで、裁判手続きの全体像を見ることにもつながっているようにも思われる。

ゼミ内では、起訴状の各自起案したものについて、全員が各人の作ったものを共有して、検討し、少しずつ公訴事実の中身について決定していく。骨子の出来上がったところで、冒頭陳述、あるいはそのためにどんな証拠が必要なのか、また、これに反駁するためにはどんなことを主張すべきか、争点はどこか、といったように、常にゼミ全体の中で議論し共有しながら進めていく、といった手順である。

2. 実践例⁽¹³⁾

(1) 2015年度・本能寺の変

2015年の担当初年度は、本能寺の変を題材に展開した。いうまでもなく歴史的事件を題材としたものであるが、ゼミ生のなかに歴史、とくに戦国時代に興味を持った学生が多く、模擬裁判への関与にも積極的に興味を持って参加しようとする学生が多かったのは、各々が興味の持てる領域で創意工夫をしながら模擬裁判を実施していく点で、結果的には、担当教員としても指導しやすい、恵まれた環境にあったといつてよいように思われる。教員としては、前任者の

(13) 関根徹監修「平成19年度模擬裁判について」「高岡法科大学紀要」19号（2008年）191頁、同監修「平成20年度模擬裁判について」「高岡法科大学紀要」20号（2009年）169頁、同監修「模擬裁判①平成21年度高岡法科大学における模擬裁判について」「高岡法科大学紀要」21号（2010年）193頁、同監修「模擬裁判②富山いずみ高校における平成20年度模擬裁判について」「高岡法科大学紀要」21号（2010年）223頁、同監修「平成22年度模擬裁判について」「高岡法科大学紀要」22号（2011年）139頁、同監修「平成23年度模擬裁判について」「高岡法科大学紀要」23号（2012年）125頁、では、大学祭等時にとくに高校生に向けた模擬裁判として、学生たち自身が作成したシナリオのほか、高大連携の取り組みでの高校生によるシナリオが紹介・掲載されている。

取り組み状況なども参考にしながら進めたとはいえ、担当初年度の手探り状態などところもあっただけに、学生たちの意欲に相当助けられた感じである。

被告人は、明智光秀とし、罪名は放火であるが、学生たちが考え出した争点は、現住建造物放火か、非現住建造物放火とするかというものであった。

学生たちの関心の端緒は、以下のようである。

史実としては信長の首のある死体が発見されていないことから、一説には、信長は本能寺で自害したのではなく、どこか別のところで死亡したのではないかと、あるいは家臣の者が信長の首を切り落としこれを外に持ち出したのではないかと、などと唱えられることがあるようであるところ、この年の模擬裁判は、ここに学生たちは注目し、物語を刑事事件として扱いやすいようにすべく、史実とは別に、独自に展開・脚色したところに特徴がある。

一般に、裁判の争点の設定ということに関しては、本学でも過去の事例がそうであったように、目撃証言の信ぴょう性を問うてみたり、殺意の有無といったように、模擬裁判のためのいわばネタを軸にして、これをもとに、いかに物語を構築して作り上げるかという点に綿密な創意工夫・準備がいる。そして、そのための証拠構造（当然反証もするが。）をはじめ、証拠物や証人などを用意し、そのうえで、物語を肉付けする形で創作していくというのが、模擬裁判の創作の基本的手筋の1つではある。方法論的にはそれも1つではあるが、本能寺の変は、むしろ逆で、先に物語が存在する（場合によっては、それを若干使い勝手が良いように脚色し、作り変えをすることもいるのであるが）ことが前提となり、その中から争点を見つけあるいは作り出すということがなされている。たとえばよく知られた事案として、殺意の有無という争点ありきから模擬裁判を構築していく、というのではなく、既存の知られた物語をいかに刑事事件化していくかというという方法である。いわば、演繹的方法によるか、あるいは帰納的方法によるかといった差異とでも言えようか。

本能寺の変のように、よく知られた事件あるいは事案ないしは物語をもとに争点化していくという試みは、模擬裁判の実施に当たっては、観客に対しての

理解を容易にするという利点があったように思われる。ただし、史実を借用することで、被告人の行為によって信長が死亡する可能性という基本的ストーリー自体の説明は無用となり、こののちに展開する模擬法廷での争点を明確にしやすくなるからである。主催者からすれば、観客たる高校生に対してそこを説明・解説することを限られた時間内にこなさなければならないという点で省力化しうるし、さらには、観客からすれば知っている事案が題材になっている関係で、それがどのように裁判になるのかという点で、興味を持ちやすい、親しみやすいということもあろう。もちろん、ゼミの学生にとっても同様で、既知の物語をもとに展開するために、情報がすでに共有できているというところから出発点となる。学生にとっては共通土台ができているところから、模擬裁判の台本を作り上げていくこととなり、結果として、情報共有のための作業を省くということが、指導者としては限られた準備・授業回数の中では、時間短縮につながるメリットがある。

学生たちの考えた公訴事実としては、家臣が他の合戦に全員が出払っており、信長のみが本能寺に所在していたところ、被告人はガソリン18リットルを調理場付近に火を放ったというものである。

これに対する被告人・弁護人の主張は、明智光秀の襲撃の際には信長はすでに裏口から逃走していたとする可能性（ないし設定）であった。

この点に思いを巡らせ、史実に脚色を加えた学生たちにとっては、仮に無人の本能寺に放火したのであれば、現住性がないのではないかという関心となる。当然、検察官は現住建造物放火を主張する一方で、弁護人・被告人側は非現住建造物放火を主張することとなる。弁護人の主張としては、（現実的ではないということは、脚本のための脚色としてひとまずは捨象するが、信長はもちろん家臣の者含めて一切が本能寺には誰も所在せず、また焼け跡からは誰の死体も見つかっていないという設定で）無人の寺に火をつけたものである、と

する主張である⁽¹⁴⁾。検察官の立証としては、(科学的にはこの点もかなり無理な設定の面もなくはなかろうが、) 跡形もなく死体が燃え尽きてしまったものの、例えば、焼け跡からは日本刀だけが発見され、これを物証として証拠請求する。そして、この日本刀を信長のものと同定するために、これを作ったとされる刀鍛冶を証人申請し、また、武士の魂たる日本刀をみすみす本能寺に置き忘れることなどはないはずであるから、信長が所在していた証拠となる。また日頃から被告人と被害者信長との折り合いの悪さがうかがい知れる、信長と家臣たちの飲み会の様子を録画撮影したビデオテープ! なども証拠物として請求された。

オープンキャンパス当日のキャストイングは、裁判官、検察官、弁護人、被告人、刑務官、書記官、暗殺者!、検察側証人として刀鍛冶、さらに当日の進行役(司会者)をそれぞれ1名ずつ、計9人のゼミ生で担当することとなった。本来ならば合議事件ではあるが、ゼミ生の人数の関係から、裁判官は1人のみ、また、刑務官も1人のみである。小道具としては、検察官が請求する証拠物として、歌を詠んだ色紙、ビデオテープ、100円ショップで求めた玩具の刀などを用意しているほか、手錠も用意している。

当日は、刑務官が被告人を法廷に連れてくるシーンから演じ、法廷内で解錠する演技も取り入れている。見学の高校生に対しては、もちろん解説もするが、推定無罪ということの意味を改めて認識してもらうきっかけにもなる。

なお、この「本能寺の変」の刑事裁判の中では、判決の言い渡しまでには至っていない。というのも、もともと事実関係を、検察官・弁護人間での争点を浮かび上がらせることを主眼としてしまっている関係から、裁判所が認定すべき「事実」なるものが学生たちゼミ内ではそもそも想定されていない、ということがある。さらには、模擬とはいえ、判決を書くとしても、(独自の認

(14) 学生自身が意図した本能寺の伽藍配置については具体的に想定があったわけではないものの、例えば人の現住する社務所との一体性が問題となった平安神宮事件を意識してか、学生においては、本能寺を普段から人の寄りつかない廃寺として設定していたようである。

定、適用ということではなければ）検察官・弁護人いずれかの立場に与して判決を書くことになるから、そのためには演出として、どちらかに与させるような仕掛けを、証拠調べの段階などで、あらかじめ仕込んでおかなければならない、というようなことになる。結果的には、自分たちで「本能寺の変」を独自に脚色、作り上げてしまっているために、むしろ判決の書きようが無くなってしまったといってよい。

そこで、模擬裁判劇のオチのつけ方としては、ちょうど被告人が光秀であったからということも多分に影響しているのであろう、学生たちが展開したシナリオは、被告人を法廷内で暗殺するというものであった（いわゆる三日天下。）。この点は、被告人が死亡した際の裁判手続きについて、学生たちも改めて認識するところであるが、傍聴人の高校生に対しても解説・説明できる手続の一コマである（刑法339条1項4号）。

もっとも、判決を用意しないというシナリオは、次年度以降、のちの模擬裁判にもこの手法は引き継がれていく。これは方法の一つにすぎないものの、見学の高校生にとっては、検察官・弁護人の主張を通じて自ら判断をしていくという、ちょうど裁判員の関わり方と同様の模擬裁判への可能性を開くものともいえよう。時間的にオープンキャンパス当日の前後の学内の企画の関係で、十分な時間が取れず実施できないままになってしまったが、高校生たちには自分なりに考え判断してもらって、有罪/無罪のパネルを用意し、掲出してもらう、また、それを受けてフロアでの相互の意見交換などのやり取り、といった段取りを予定していたからである。

ちなみに、学生たちの設定によれば、信長の家臣の柴田勝家が検察官になっている。実際に裁判劇、としてのみの実施であれば、単なる小道具の一つに過ぎない起訴状の書面は、高校生をはじめとした傍聴人たる観劇者からは、遠目にそれらしい書面に見えれば十分事足りるものであり、そこまでの設定は多分不要である。しかし、学生にとっては単なる演劇ではなく、模擬裁判の創作・実施を通じて裁判手続きを学ぶ授業でもあることからすれば、当然に起訴状の

書面にどのようなことが書かれるのかは確認する必要があるのであって、そのために、被告人の氏名、公訴事実、罪名を記載しなければならないことを学生たちは認識するし、訴因もできる限り、日時、場所及び方法をもって罪となる事実を特定しようと試みるわけである（刑訴256条）（なお、この起訴状のほかにも、冒頭陳述書や弁論要旨などのほか、シナリオ作りが進展するに従い、証拠等関係カードなどの書面も用意し、当然そこに現れた、本能寺の実況見分調書などの証拠類をも、単なる「小道具」としてではなく、可能な限り忠実に作成して準備している。）。そうした中で、検察官の名前を柴田勝家、などとした起訴状が作成され、さらには被告人の本籍を「岐阜県可児市明知城」とし、現住所についても、本籍から住所変更をしていないものと設定していたあたりに、学生ならではの愛嬌がうかがえるほか、このような学生ならではの「工夫」がここかしこにちりばめられることで、学生の模擬裁判の取り組みに向けた興味・関心の喚起ないしは、モチベーションの維持にもつながっていたものと思われる。

なお、これに関連して、裁判所の名称をどうするか、地裁であることは論を待たず、そのために模擬裁法廷は「九州国際大学地方裁判所」を名乗るところ、犯罪地とされる本能寺が京都に所在することから、学生たちは九国大地裁京都支部、という設定とした。ここでも、学生たちの裁判管轄、土地管轄について意識した知識が反映されることとなるのである。

担当初年度であり、また、後年に実施した模擬裁判運営のモデルともなるので、やや冗長ではあるが詳細に紹介した。基本的には翌年度以降も、方法的には「本能寺の変」を踏襲することとなっていく。とくに、既存のよく知られた物語の中から争点を設定し、場合によっては争点のために元の物語を作り替え、進めていく、という手法⁽¹⁵⁾は、授業としての指導の上でも、またオーブ

(15) 既成のおとぎ話、昔話を題材にこれを刑事裁判として展開していく、という手法は、元はテレビ番組として放送されたものであるが、NHK Eテレ「昔話法廷」制作班編・今井雅子原作・イマセン法律監修『昔話法廷』（金の星社、2016年）、NHK Eテレ「昔話法

ンキャンパスの観客の側でも理解しやすいという意味で有効だったのではないだろうか。

なお、証人の宣誓時には、傍聴人・観劇者にも、実際に法廷傍聴をしている雰囲気味わってもらうために、裁判長から起立の要請を演出している（当日の高校生たちは、当初見学だけのつもりであっただろうが、いつの間にか傍聴人としての「役」を求められていたことになるわけで、戸惑いもあってか、改めてナレーター担当の学生からも起立を促されている。）。これについては、のちに記載されたアンケートによると、単に座って見ているだけではなく本物の法廷を見ているようで面白かった、などの感想が寄せられた。

担当初年度は、ゼミ生の関心のありかによって、偶然、歴史的事件を素材とした展開となったが、誰もが知っている事件（あるいは童話等）を利用することは、高校生など観客の興味・関心を引く点では大きな利点であるものといえ、この後の2年間の実施した模擬裁判も同様の作成手筋となった。方法論的には、裁判のための争点をことさらに作り出した形で創作していったというものではないことに特色がある。たとえば、殺意の立証をテーマとして設定し、これに関わるものとして殺人と傷害致死の争点（あるいは殺人未遂と傷害でもパラレルであるが）を中心に添え、そのためにこれにまつわる一定の事件を作り出していく、という展開によった模擬裁判も考えられようが、この種のやり方は当職の実践例とは、逆の展開例である。もちろん、（前任者がかつてそのように展開してきたように）ねらい、目的によっては、このような脚本もありうるものではあるが、学生のモチベーションの維持、高校生に対する興味の喚起

廷』制作班編・オカト國ヒコ原作・イマセン法律監修『昔話法廷 Season 2』（金の星社、2017年）に所収の各作品にも表れている。裁判員となった主人公が、面前で行われる、昔話をもとに展開する刑事裁判のやり取りに接し、のちの評議の場において自分の考えをまとめていく、というストーリーが基本となっている。ここでは、人を裁くことの難しさに直面する、主人公の内心の逡巡が描かれている。作品では、評議に重きが置かれているようで、裁判の中では事実関係や情状について争点となっているものの、やはり判決という結論までは作品中でも描かれてはおらず、その判断は最終的には読者自身に投げかけた（考えさせる）構成になっているのが特徴であろう。

※なお、『昔話法廷』については、本稿執筆後『Season 3』の近刊の報に接した。

という点では、相応の意味があったのではないかと考えている。

(2) 2016年度・桃太郎

2016年度は、昔話桃太郎を題材に展開した。被告人は桃太郎とし、罪名は強盗殺人とした。争点としては正当防衛の成否である。具体的には、桃太郎が鬼退治に出向いたこと、のみならず、鬼のもとにあった財宝も持ち出している点に学生たちは目を付けた。桃太郎が運び出した財宝は被告人が主張するように、はたしてもとの持ち主である村人に返す目的であったのかどうか、不法領得の意思の有無について争点となりうる。これに対して検察官は、鬼退治という名目で強盗を働いたのではないかという主張である。この点、学生は領得の意思の立証方法として、被告人は日ごろから働いているようには見えないものの、しかし浪費ぶりが激しいこと（銀座の高級時計店の領収書が存在する）をあげ、これらの時計は奪った財宝で購入したものだ、などと展開しようとしていた（反面、被告人質問で実は、デイトレーダーであったことが判明する。）。

授業の中では、正当防衛の成立要件として急迫性の議論もなされたほか、犬、猿、雉が同道することから、共犯関係も議論となった。また、村人のうち誰かが桃太郎に鬼退治を依頼（ないしは教唆）した、ということもあり得、そうであれば、村人との関係での共犯関係の有無も模擬裁判の物語の展開としてはあり得たはずである。しかし、オープンキャンパスの（せいぜい法廷のやり取りにかけられる正味の時間が30分程度という）限られた時間内での企画、さらには高校生に向けた演劇という視点からは、内容がややこしくなっては困るという面もあるため、なるべくシンプルな争点を作ることが基本とならざるを得ず、ゼミでは展開していた議論・論点も絞らなければならなかった。

なお、この年も専門演習Aの3年生、1学年のみによった運営なので、直接に先輩からの継承はない。前年の実施例の教材としては、本番ではなく、撮影が自由にできた当日のリハーサルの方の様子を記録として保管してあるので、これを教材として、自分たちがこれから作り上げる模擬裁判の模様をイメージ

してもらおう狙いで、年度初めのゼミの時間には学生たちには見せた。

この時の桃太郎では、裁判官、検察官、弁護人、被告人に加えて、検察官側の証人として、村人の金太郎、被告人側の証人として、村人の一寸法師の6人が登場する。この年は、書記官、刑務官はいない。ゼミ生の数に制約を受けたことによっている。もっとも、当日は傍聴・観客の高校生から、検察官と弁護人に各1人ずつが加わったほか、証人自身も同様に高校生と交代したというキャスティングもあった。

前年の本能寺の変では、せいぜい、証人が宣誓する際には、傍聴人たる観客の高校生たちにも、起立を促すという演出を取り込んでいたに過ぎなかった。が、この年から、高校生を単に観客、傍聴人としての参加のみならず、フロアーの中から法廷の配役にチャレンジしてみたいという希望者を募った点に違いがある。当日に恥ずかしがらずに積極的に参加してくれる高校生がどのくらいいるのか、いなかった場合に備えてあらかじめ座席の裏側にくじを張り付けるなどの用意を仕掛けておいたが、幸いにもくじの出番は不要で、果たして多くの高校生から手が上がった。この年は、検察官、弁護人、証人の役を一部演じてもらうこととし、当日参加の高校生には、自分の役に対応する「主任」検察官・弁護人役の、さらには本来やるはずであった証人役の学生から、それぞれ演技指導を受けてもらったうえで、模擬裁判に参加してもらった。検察官・弁護人については高校生に当該配役のセリフの一部をゆだね、そして、証人についてはゼミ内で予定していた学生に代わってすべてを台本をもとに演じてもらうこととなった。

前年から、すでに証人の宣誓時には、観客高校生に対しても「傍聴人」を演じてもらったわけだが、この年はさらに高校生の参加範囲が多くなったことで、一緒に模擬裁判にかかわる一体感が生まれ、前年指摘のあった臨場感とともに作り出すことができたように思う。

(3) 2017年度・浦島太郎

2017年度は、同様に昔話浦島太郎を題材とした。被告人は乙姫とし、罪名は浦島太郎を被害者とする殺人未遂である。本能寺のようなよく知られた事件を用いることで、イメージしやすいということは繰り返し述べてきたが、読者諸賢には以上の説明だけでも模擬裁判の基本的筋書きが容易に察しが付くはずである。

毒入り玉手箱により浦島太郎が死にかけたという事案は、学生の考え出した設定によれば、竜宮城において長らく生活する中、乙姫の妊娠を機に結婚の報告をすべくいったん故郷の両親のもとに帰省する浦島太郎に対して龍宮城の特産物を玉手箱につめて手土産として渡したものの（弁護人側の主張）であるが、他方で、このまま逃げてしまうのではないかと疑念を抱いた被告人乙姫が、二人の中が破たんしてしまったのであれば、いっそ殺害してしまう思うに至り、致死量の毒ガスを仕込んだ玉手箱を手渡したものである（検察官側の主張）とする対立が軸になっている。

玉手箱を浜で開函した時点では、すでに毒ガスが減少しており、殺人には至らなかったという殺人未遂の設定であるが、学生たちによれば、玉手箱が何者かによってすり替えられた可能性を仕掛け、動機の上からも、子の父となった夫浦島太郎に対する殺意を抱くのはおかしい、という可能性を盛り込んだ。

2015年度、2016年度は、当職が専門演習A（3年次配当科目）だけの担当であったことから、いずれも1学年のみで行われた。2017年度では、専門演習Aに加えて専門演習B（4年次配当）の科目も担当することとなり、運営上ではあるが、ここに本学部初めてと思われる、複数学年同時の演習が実現することとなった。オープンキャンパスが間近に迫ると正規の時間内ではならず、実際には、キャリアチュートリアルⅢ、Ⅳの時間帯も用いることとなった。

ゼミ生の数としては過去最大となったところ、被告人乙姫をはじめ、裁判官、検察官、弁護人、書記官、刑務官（いずれも各1名ずつ）のほか、証人を3人（タイ、ヒラメ、カメ）用意することができるまでの人数的な余裕があった。もっ

ともオープンキャンパス当日は、前年と同様に、高校生の中から検察官、弁護人、証人の一部の配役について募った。なお、被害者浦島太郎は病院に入院中という設定で、法廷に現れることはなかった。代わりに病院で録取された調書が証拠採用されている。

Ⅳ むすびに代えて

オープンキャンパスに限らず授業としても、「法学部ならではの」の取り組みである模擬裁判について、教育実践のためのノウハウといった組織的継受という関心から、本学のカリキュラム上の位置づけの変遷と、3年間という限られたものではあるが、当職が実施してきた模擬裁判例を紹介してきた。学内において、本学の建学の理念たる「塾的精神」は、実は、実習や体験活動を伴う質の高い効果的な教育とする、アクティブラーニングそのものであった、としばしば言われ、その先見性について誇られるが、法学部の模擬裁判自体もまたアクティブラーニングの実践におのずとなっていたようである。

オープンキャンパスに向けて模擬裁判を企画、運営、実施するという目標は、演習という正課として行われるものではあったが、高校生に向けたいわば演劇という側面については別の視点から、桃太郎を行った2016年度末には後日談があるので、最後にこれについて述べることにして、むすびに代えたい。

北九州市内の県立高校の学習会（本学の施設を利用した2日間の通所合宿として行われる）が、例年、年度末に本学の施設を利用して行われている⁽¹⁶⁾。

元来は高校側独自の取り組みではあるものの、来学の上、本学の施設を使用

(16) 本学では、北九州市内の高等学校と教育連携（地域連携）を図ることで、地元企業で活躍する人材を地域という枠組みで育成することを念頭に置いている。地元の人口滞留を図るとともに、かつ地域の活性化を狙いとした取り組みである。こうした趣旨から、本学では2016年度までに5つの高校と協定を結んだ。さらに、2017年度には2つの高校と協定し、現在、合わせて7つの高校との間で、高大教育連携協定を結んでいる。県立小倉南高等学校とは2017年に締結した。

して行うのであれば、本学教員による各学部学科の模擬授業も盛り込んではどうかという、本学担当事務部署から高校側に対して提案をさせていただいた。これに対して先方高校からは諾とし、法学部としてはその模擬授業をこのオープンキャンパスの再演を企画した（当日は、高校の授業時間同様に50分の時間が割り当てられたが、模擬裁判本体はもちろん、裁判手続きの概要などの解説や質疑応答もオープンキャンパス以上に盛り込むことができた。）。実際にはオープンキャンパス用にゼミ生によって作成された台本を、学習会に当日参加する高校生にその役になりきってもらって演じてもらうというスタイルであった。

その際、事前にこちら側からは模擬裁判を行うこと、登場人物として一定数が必要となるが生徒の配役をあらかじめ決めておいてもらうことを高校側には伝えたのみで、それ以上の打ち合わせなど一切のやり取りはなかった。

参加高校生は学習会当日の法廷教室に入ってきたときに大半は傍聴席に座るものの、配役を受け持つこととなった高校生はその場で当職からシナリオを渡され、裁判官役以下の全配役（扱ったのは、「桃太郎」の「再演」であるが、裁判官役の3名は法服のレプリカも着用したうえで法廷に臨み、検察官、弁護人も3名ずつ配役し半年前の夏のオープンキャンパスと同様の陣容で進めた。）は、定められた箇所座り、各自台本をもとに自分たちの受け持つセリフを割り振り、数分程度のごく簡単な打ち合わせをしたのみで本番となった。法廷内で用意した台本のセリフをしゃべるという点では、オープンキャンパスの際にゼミ生たちが行なったこととなら変わるところがない。むしろ当日突然に台本を渡されていきなり朗読をすることになったのであるから、「役がある」ということは事前に言われていたとはいえ、相当に戸惑ったであろう。なお、法廷内の机の配置、場所的都合から、当職が書記官を務めることで、演技指導・演出を担当した。

このような一切の練習、リハーサル無しの、ぶっつけ本番ではあったが、高校生たちはそれぞれの配役につき、（法律用語のみならず、法医学用語も出て

くるため、時折、読めない字もあったりはしたものの、) 見事に演じていた。終演後、感想を聞いてみたところ、少なくない高校生が異口同音に（予想通り）法律用語の難解さを唱えていたが、とくに検察官役の高校生からは、「読み上げるセリフが多いのに加え、扱う資料（証拠）の数も多くて大変だった」という声が寄せられた。担当者としては、これを受けてフロアーに対して、なぜ検察官の役割が多くなるのか、立証責任の話を展開にするのに好都合の感想であった。

ここについても自負させてもらえば、学生たちの作ったシナリオの完成度の高さであろう。当日まで一切事前に説明を受けていない者が、渡されたシナリオを朗読するだけで、一定の裁判劇として十分成り立つというものであったからである。模擬裁判を通じた、高大連携の営みでもあった⁽¹⁷⁾。

(17) 2017年度末の2018年3月においても、同高校の学習会において、前年同様に模擬裁判の再演（浦島太郎リターンズ）が予定されている。



写真 1



写真 2



写真 3

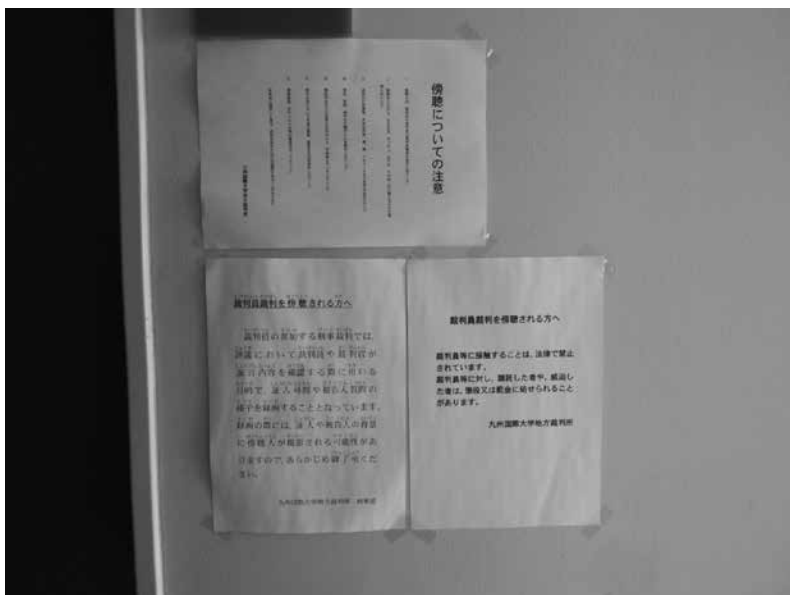


写真 4

写真1 法廷教室内、オープンキャンパス当日のリハーサルの様子。写真の向かって右側が教室の外、すなわち廊下側になる。写真ではわかりにくい
が、各机には、厚紙で作成した「裁判官」「検察官」「弁護人」「被告人」「書記官」の各名札が置いてある。裁判官役用には、前前任者の時代に作成されたレプリカの法服が3点用意されているが、真夏時なのでこのリハーサル時にはまだ着用していなかった。合議体でなければ1着しか使用しないので、演出として「らしさ」のために、実際とは異なるものの書記官役がこれを流用して着用することもある。

写真2 法廷教室の出入り口のドアの様子（傍聴席側）。上部には、「開廷中」のランプが点灯する。ここまで趣向を凝らした模擬法廷は寡聞にして聞かない。当初の設計者の気概を感じられる装置の一つである。

写真3 「開廷中」ランプ（拡大）。

写真4 常設の設備ではないが、随時貼り紙の形でドア横に掲出する案内（拡大）。裁判所名は九州国際大学地方裁判所となっている。いずれの掲示物も福岡地裁小倉支部のものを参考に作成している。期日表を法廷教室の入り口に貼り出して模擬裁判を演出していた事例もあったが、現在のところ、こうした掲出物などは教室の備品として用意しているわけではない。担当者としては、本物の裁判所同様に、これら注意書きをプラスチックのパネルなどで常設してもらえれば、「法廷等の秩序維持に関する法律」、法廷警察権などの存在も、学生たちには話題提供しやすくなるのではないかと考えている。